

知 識 探 訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

伝統的カウンセリング：あるいは「身体感覚としてわかる」

板垣明美



ココナツの木に覆われた平和な村の風景に溶け込んでボモらは淡々と仕事をこなしている (筆者撮影)

マレーシアの伝統医療には悩む人を助けるために太古から受け継がれたような知恵がある。

私はマレーシア半島部のある村で、霊界と交信して人々を治療し、尊敬を集めている高齢の治療師に出会った。彼は祖先でもある「虎」の助けを借りて病気を治療する仕事をしている。村人は彼をマレー語でボモ・パサルと呼ぶ。パサルとは「大きい」という意味である。ボモ・パサルを大ボモ(おおぼも)と呼ぶことにしよう。

彼は高額の謝礼を要求することはなく、差し出されたお礼のみを受け取る。大ボモは治療の祈りにコーラン(イスラム教の聖典)の一節を含めており、祖先霊(「虎」)はすなわちイスラム教のジン(目に見えない霊的存在)であり、究極的には神の助けを乞うているという。植物療法のボモ、接骨のボモなど各種の治療師がいるが、大ボモと呼ばれるボモは全ての霊的世界と交流できる。

私たちは毎日語り、相手の話を聴き応答する。そこで即興のように、化学反応のように創造される文化を私は「第3の文化」と呼んでいる。創造する文化の中で行動や言葉によって人が痛めつけられることもある。マレー人の中では人に愛されるための愛の呪術や、憎む人を攻撃する憎しみの呪術があると考えられている。その呪術によって病気が引き起こされることがある。

私が出会った大ボモは人から病人へと向けられた攻撃的呪術に対する対抗呪術によって、病人を癒やす。彼は「虎」の霊を呼ぶことができるのだが、「虎」は森にいた一般的な動物の虎ではなく、彼の祖先であり、村人の1人は「大ボモの祖先は『虎』と結婚した」という。大ボモは家系によって引き継がれる「虎」を祖父から継承したという。

彼は主にカウンセリングと対抗呪術とマッサージと呪文を唱えた植物薬で治療を試みる。「虎」が大ボモに宿った時、人間としての大ボモの記憶はないので病人は微妙なことも「虎」に耳打ちで話せる。病人のために対抗呪術で戦ってくれるのは「虎」なのだ。

大ボモは、病人の家に外向き、夜半、病人のごく身近な人々との治療の集まりを主宰する。彼は安息香をたいた部屋で祈りを唱え、「虎」を呼ぶ。「虎」を宿した大ボモは言葉を発しなくなる。居合わせた人々は「彼が来た」とささやく。

呪具(呪いの道具)を探す「彼」は四肢でゆっくりと起き上がり四肢で地面を歩き、治療に参加している人々と共に土を掘り、土の中から呪具を口でくわえて部屋に帰る。村人に「彼」と呼ばれる「虎」は野生と人間の境界にあり人々に敬意をもって迎えられている。

見つけた呪具は人型に針が刺さっていて強烈な負のイメージを帯びていた。居合わせた人々は驚き、叫び声を上げたり、隣の部屋まで逃げたりする。「虎」が来た瞬間の緊張した「あっ、彼が来た」と言うささやき声、四肢で歩き始めた彼の後を慌てて追う人々、ここを掘れという「彼」の指示を受けてスコップなどを探して走り回る人びと、針が刺さった呪具から針が丁寧に抜き取られたときの安堵(あんど)。

治療の場は、病人のために皆が頑張り、緊張や痛み、そして霊的存在を感じる身体感覚に満ちている。

治療は伝承された知識・知恵と身体的な訓練に裏打ちされているがそれだけではなく、治療師と居合わせた人々、そして病人が、現場で機転を効かせて即興を加えて創生する相互作用である。それは音楽のセッションにも似て、一人一人のテクニックと意思疎通と愛で喜びをもたらそうとする全員が演ずる1回限りのアートのようだ。その中心に負のアート、針が刺さった呪具人形があることは示唆的である。

< 筆者紹介 >

1993 年、筑波大学大学院博士課程歴史・人類学研究科単位取得退学。博士(文学)。元横浜市立大学大学院都市社会文化研究科准教授。専門は文化人類学、研究分野は医療人類学、文化生態学。薬剤師の免許を持つ。治療師について詳しくは著書『癒しと呪いの人類学』(春風社、2003 年)、マレー人農村の日常に見る癒やしについては『ペルブアルプアルの世界：マレーシアの柔構造時間と柔構造社会』(春風社、2024 年)参照。